

甲子園出場の野球部幹部(昭和30年)

野球部、甲子園への 切符を手にする

昭和三〇年夏、全国高校野球選手権大会の県予選に、岩高野球部は次のような布陣で臨んだ。

部長 戸嶋正夫

監督 川村昌司

ピッチャー 村川

キャッチャー 田中(キャプテン)

ファースト 名久井

セカンド 平野

サード 板垣

シヨート 小泉

レフト 佐々木

センター 田口

ライト

沢野

当時、夏の甲子園大会には現在のような一県一代表制が採られておらず、全国から二三校、北東北では秋田・青森・岩手の三県からただ一校だけが奥羽代表として出場できるにすぎなかった。甲子園出場は現在よりも遙かに「狭き門」だったのだ。

県予選を控えて、岩高野球部の前評判はけっして高くはなかった。春の東北大会盛岡予選では一回戦で盛岡一高に八対三で敗れていた。夏の県予選直前の練習試合でも盛岡商業に大敗を喫した。ただ、最後の仕上げの合宿で、中軸の田中・村川・板垣・田口・小泉あたりが本来の当たりを取り戻してきたのは明るい材料だった。普段の練習場に恵まれず、校庭の使用は週に三日のみ、あとは市営・盛鉄・岩大の球場を借りて渡り歩いた。三球場が使えないときは、河北小学校の校庭の隅を借りてバント練習をしたり、他の部が帰ってから校庭でバッティング練習に励んだ。精神的にハングリーな環境下での、苦しく厳しい練習の成果をすべて発揮しようという気迫だけではどのチームにも負けなかった。

県予選が始まると、つねに六分四分で劣勢の予想にもかかわらず、岩高は一関二高、黒沢尻北高、花巻北高の強豪校を次々と打ち破った。軟投派・村川の沈む球が冴え、相手打線の打球はほとんどゴロになった。ピンチをこごとく

併殺で切り抜けた。セカンドの平野は、一試合に少なくても四回、多いときには六回もダブルプレーを成立させている。

割とエラーが少なかつたのは、岩高グラウンドのお蔭だつた。石ころだらけでよくイレギュラーし、油断をすればすぐにケガをする。自然と打球に対する集中力が養われた。ましてや、よく整備された市営球場のグラウンドでは、イレギュラーバウンドなどまず起こらず、安心して守れた。

村川の家は商店を営んでいた。店が忙しくて球場へ応援に行けないお母さんは、試合が始まるとラジオの前に座つて、ラジオに向かつて呼びかけていた。

「おめはんいい球投げるんだんちエ」

「打つておぐれやア」

「第一おめはんのために負けだと言われねアよにしておぐれやア」と。

村川の一投一打には、母親の温かい、しかも必死の祈りがこめられていた。村川に限らず、そして昔も今も変わらず、この心情は我が子、我が兄弟を選手にもつ誰もが共通に抱くものであろう。バッターボックスに立ったときも、選手一人が打っているのではなく、家族も一緒になつて闘志を燃やしていたのである。それは、選手の家族にとどまらず、本校関係者全員の気持ちでもあつた。

ともあれ、こうなると試合がそのまま練習の

役割を果たし、岩高チームは尻上がりに好調となつた。準決勝で一戸高を一四対九と破り、決勝では優勝候補の宮古高を相手に回して二対〇と勝利し、みごと県大会の優勝を成し遂げたのである。

続く奥羽大会は、県大会の一週間後の七月三日から盛岡市営球場で行なわれた。一回戦（準々決勝）の相手は実力ナンバーワンと評されていた秋田高だつたが、岩高ナインは四対〇で完勝を収めた。二回戦（準決勝）では県大会で顔を合わせ、共に奥羽大会に出場した一戸高とふたたび対戦し、四対〇で返り討ちにして決勝に進む。決勝の相手は強豪の八戸高。岩高は勝つた。スコアは五対三。ファースト名久井がウイニングボールをキャッチした瞬間、つまり甲子園出場が決定した瞬間、キャプテンの田中は思わずキャッチャーマスクを投げ上げた。スタンドの応援団も歓喜に包まれた。ある老先輩は「開校以来、これ以上の感激はない！」と絶叫した。

勝利のグラウンド一周のあいだに、平野の胸には感激とともに不安も湧いてきた。ここ何年か、東北の代表は甲子園の一回戦で惨敗して帰ってきていたからだ。

「オラだち一体なんじよなるべ」と平野は沢野と話した。

球場からは同窓会が手配したオープンカーに乗って市内をパレードした。オープンカーに乗

るとき、女の子から人形を差し出されて小泉は戸惑つた。どうしようかと思つていたら、戸嶋部長が「もらつておけ」と言つてくれたのはつきりと覚えていゝる。その戸嶋先生も、いまは亡い。

優勝パレードの先頭車には山中校長が乗り、生徒の自転車隊がナインに続いた。沿道の建物からは紙吹雪が舞い、もう甲子園で勝つたような騒ぎだつた。みな市民の好意が身にしみてジンときた。

夢心地だつたせいも、田中にはパレードのときの記憶があまりない。先生から挨拶の要領を教えられたが、どうもウロ覚えだつた。入院中の父親に勝利を報告し、家に帰つたら近所の人達が祝勝会を開いてくれた。嬉しかった。だんだんと優勝の実感が湧いていた。

甲子園で強豪を破る

岩高チームは八月五日に盛岡を発ち、七日に甲子園の土を踏んで初練習を行なつた。翌八日には一回戦の相手が神奈川代表の都会チーム・法政二高と決まつた。八月一〇日の開会式で七番目に入場した岩高選手の顔は、どれも誇らかに輝いていた。開会式が終わつた大会初日の第二試合が、岩高対法政二高の試合だつた。

新聞は七分三分で法政二高の有利を予想していた。県予選から不利の予想をくつがえして勝つのがならわしのようなものだったので、選手たちはすこしも動じなかったが、相手の実力については皆目見当がつかなかった。正直に言えば、負けるにしてもあまり恥ずかしくないスコアで、と思うところもあった。

守りについた一回表、相手のトップバッターはショートの吉沢。彼は法政二高のキャプテンであり、開会式では選手宣誓も務めていた。その吉沢を、村川は三振に打ち取った。これで相手に対する恐怖感は消えた。一回裏に岩高は先取点を挙げ、三回、五回と得点を重ねた。三対〇のシャットアウト勝ちだった。村川の好投と田中の闘志、板垣の好打、さらに内外野が一丸となった好守で、強敵を打ち破ったのである。

大会五日目の坂出商業を相手にしての二回戦は雰囲気はぜんぜん違っていた。新聞の予想は五分五分と出た。相手投手の情報なども入った。だが、いざバッターボックスに立つてみると、軟投派と聞いていたピッチャーから今まで見たこともないような豪速球が投げ込まれてきた。一点を先行されての五回、岩高は小泉のレフト前ヒットを生かし、村川のショート右を抜くヒットによって同点としたが、七回に致命的な二点を奪われ、善戦空しく三対一で敗退した。選手たちの目に悔し涙が光った。

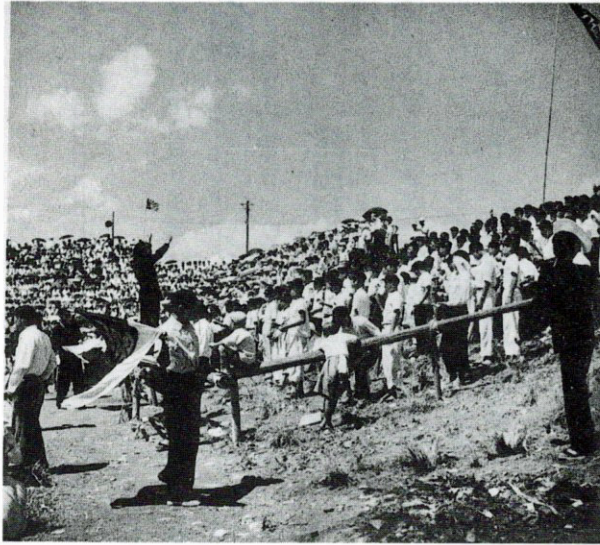
しかし誰が彼らを責めるだろうか。晴れの甲

子園大会に出場し、堂々一回戦を突破したのである。すでに校史に不滅の金字塔を打ち立てたのだ。さらに言うなら、岩高が三対一と迫った坂出商業は後の試合を勝ち進み、この大会の準優勝に輝いたのであった。

在校生、職員、父母、卒業生……母校関係者のすべてが、これほどひとつになったことはなかった。また盛岡市民や岩手県民も、岩高チー

ムの健闘を讃えた。

岩手に岩手高ありと天下に知れ渡ったのであるから、誰もが母校に限りない誇りを抱いた。まさに石桜精神の開花であり、母校の雄躍期を端的に象徴する出来事であった。あのとときの精神的な高まりを、われわれはいつまでも大切にしたいものである。そしていつの日か、あの感激をふたたび味わいたいものだ。



校歌ヨイ!!(盛岡市宮グラウンドで昭和30年)



応援団の面々(昭和30年)